
2016 年度「支部横断企画」報告・傍聴記

企画委員会

【報告】(加藤いつみ・中部支部)

一節切尺八のつどい in Nagoya 「一節切尺八の軌跡」

江戸期に盛んに奏された一節切尺八(以下一節切と略記)の復興を目指して、3月4日(土)名古屋市東区の東桜会館にて演奏会を開催した。一節切は、17世紀の上方で流行った縦笛で、僧・武士といった知識階級から町人など広い層に愛好されたが、19世紀初期には忘れられた楽器である。20年程前から明暗真法流尺八奏者・相良保之氏が復興を手掛け、第1回の演奏会が2015年に京都の東山正法寺にて催された事もあり、その存在は徐々に知られるようになった。

今回は、一節切をより理解し興味を持ってもらうために、講演と演奏という二つの形式を執り、3月に加藤が「一節切尺八の研究」で修士の学位を取ったその報告をも兼ねて企画した。第一部は私と相良保之氏の講演で1時間30分、第二部は青森から大分と全国の一節切の愛好者、16組による演奏で進められた。幸い、地元の中日新聞に公演案内が掲載されたこともあり、会場は120名ほどの聴衆で埋め尽くされた。

最初に私が「一節切の軌跡」というタイトルでパワーポイントを交えて、「尺八の種類」「その歴史」「変遷」「雅楽から受け継いだ音楽理論」、上方での「発展・衰退」、その後江戸における「復興」、そして「21世紀に望まれる発展のあり方」について話した。一節切の知識を持ち合わせない人をも考慮して先ず、尺八の種類、そしてそのルーツから始めた。

最初の尺八は、遣隋使・遣唐使により中国から伝えられた。聖徳太子(574～622)が吹いたと謂れのある尺八が国立博物館に1本、正倉院には聖武天皇(701～756)が愛でたという尺八が8本現存している。雅楽(古代)尺八と呼ばれるこの笛は、宮中や寺・神社の祭儀・儀式の折に奏する雅楽の中で吹かれたり、貴族たちの遊興の折に用いられた。しかし、仁明天皇(832～50在位)の代から半世紀に掛けて、多種に亘る外来音楽と楽器の簡素化を図る「楽制改革」が行われた事により、尺八は雅楽から外された。この結果、尺八は衰退の一途をたどり、平安期以降はその姿を消してしまった。貴族の手から離れた雅楽尺八に代わって、鎌倉初期には“短笛”というやや筒の短い笛が登場した。この笛が一節切の前身楽器ではないとも言われている。しかし、一節切という呼び名は16世紀後期に成立した高三隆達(1523～1611)の『隆達唱歌』の中に最初に登場するので、この“短笛”を一節切と断定することは難しい。一節切がその姿を明確に顕しているのは『七十一番職人歌合』(1500年頃)の絵の中で琵琶を弾く盲法師の膝元に描かれた一つの節、前面に四つの穴をもつ笛である。しかし、この絵の中でも尺八と記され、一節切という名称は見られない。

一節切は、雅楽の理論を受け継ぎ、その理論上に成り立っている。季節に調を合わせる「時の声」、「宮・商・角・徴・羽」の五音音階、西洋音階の長・短音階に相当する「律・呂旋法」の二種類の旋法などである。また、17世紀は11冊の譜本が上方で成立し、一節切の文化が花咲いた時期であった。その基礎を作り上げたのは大森宗勲(1570～1625)であり、彼は5冊の譜

本を成立させた。それまでの学習方法が、流派の伝統を守る師匠の口伝であったために普及することが難しかった時代において、宗勲は伝承された“手”と呼ばれる曲を集めて、『短笛秘伝譜』(1608)という譜本を著した。この譜本の成立により、一節切は、知識層のみならず一般大衆の間に伝播していった。相良保之氏は、その経緯を詳しく語り、＜中興の祖＞としての大森宗勲の功を強調された。

第二部の演奏は、16組の奏者が各々の曲について解説と想いを語ってから吹奏した。一節切本曲の《手》、民謡《こきりこ》、わらべ歌《ひらいたひらいた》、聖徳太子が吹いたと伝わる《蘇莫者》、西洋の《アメージンググレース》《Flow My Tears》、福田蘭童作《桔梗幻想曲》と様々なジャンルの曲が披露された。奏者の楽器も古管から自身で製作したもの、複製の雅楽尺八まで多種に亘り、吹き方、音色もかなり変化に富んでいた。

今回、簡単ではあるが、聴衆にアンケートと感想を求めた。その結果35名の方からの回答があったので、それらをまとめてみた。

1. 性別・年齢：

男性 22 人 (63%)、女性 13 人 (37%)。70 歳以下 17 人 (49%)、以上 18 人 (51%)

2. 一節切のことを知っていたか：

知らなかった 11 人 (31%)、知っていた 23 人 (66%)、吹いたことがある 1 人 (3%)

3. 講演・演奏について：

面白かった。またゆっくり聞きたい。聞きたいと思っていた音色に合わせて嬉しかった。ちょっと難しい。安らいだ。現代の曲を奏する事に今後の楽しみが……。柔らかな、優しい音色。歴史は初めて聞いた。歴史上の人物との関係を交えながら聞くとかつての華やかさがわかった。大きな音の出る楽器ではないが、音の細部を聞き取ると、いろんな音色がある。興味がわく。身近で宇宙と同調する音色。ストレスも吹き飛んだ。天皇も所望したことを知り、日本の文化に与えた影響が大きい。公演時間が長すぎる。内容が難しい。初めて聞くことばかりで久しぶりに勉強した感じ。プロジェクターでよくわかった。復活を願う。努力に感謝。はるか遠い地から聞こえてくるような感じ。戦国武将の間にも一節切の空気があったことに驚いた。歴史の深さを知った。尺八との違いがわかった。衰退した理由が掴めた。音色の特徴についてもっと知りたい。段取りが悪い。洋楽を吹くのは合わない。同じ曲を尺八と一節切の両方で吹いてみたい。……。以上のような結果を得ることが出来た。

これらをまとめてみると以下のことが分かった。聴衆は70歳以上の男性が多く、一節切について知識を持っている人が70%ほどあり、音が出なくても歴史を顧みながら寛げる楽器であると捉えていた人が何人かあった。また、＜一節切を習いたいか＞といった問いに対して13名の反応があった事など、将来に向けて明るい展望を掴むことが出来た。私は、今後の一節切の復活・発展の道標として古典の研究を掘り下げる事、江戸期の流行り歌を楽譜化する事、わらべ歌・民謡を取り上げ編曲や二重奏にする事、などの課題を通して、大人・子どもも共に楽しめる楽器になるような研究と教材開発に努めたいと考えている。

【傍聴記】（小沢優子・中部支部）

江戸時代後期に衰退し、以後忘れ去られてきた一節切尺八の復活を旨しその魅力を伝えようという「一節切尺八のつどい in Nagoya」が名古屋市東区の東桜会館で開かれた。20年ほど前から起こっている一節切再生の気運を受け、さらなる発展を願っての企画である。開演前にすでに会場は満席となり、臨時の椅子が用意されるほどの盛況ぶり。聴衆は120人ほどであった。

第一部と第二部から成り、第一部は講演が2題。まず、リコーダーやオカリナの研究に長く携わり、近年一節切にも情熱を傾けている日本音楽学会中部支部の加藤いつみ氏による「一節切の軌跡」。今年度提出された中部大学大学院の修士論文に基づく講演で、雅楽尺八、一節切尺八、三節切、虚無僧尺八についての説明に始まり、狛近真の『教訓抄』、豊原統秋の『體源鈔』、土佐光信の『七十一番職人歌合』、中村宗三の『糸竹初心集』といった当時の文献に見られる一節切の記述や絵図や、一節切の文字譜、雅楽の音階理論からの影響、浜松の龍潭寺の屏風「遊芸之図」に見られるような庶民の遊芸楽器としての受容、さらに、衰退後も奏法や曲が尺八真法流や竹保流に引き継がれていることがわかりやすく語られ、最後は一節切をめぐる現状と展望で締めくくられた。

もう一つの講演は、千葉県柏市在住の尺八明暗真法流奏者で一節切の演奏と研究の第一人者として知られる相良保之氏の「大森宗勲について」。織田信長の家臣であり、〈一節切中興の祖〉と言われる大森宗勲をテーマとし、宗勲に関する記述のある資料の内容が紹介され、続いて、宗勲が学んだ先人たち、宗勲の楽譜本、「迎涼草」「餘音」「靈音」「白雨」といった風流で洒落た名前が付けられている宗勲所持の一節切の楽器、幸田露伴が所持していた一節切の「織姫」の名の由来について、また、『古事記』『日本書紀』『竹取物語』や宮中の行事で「節」が「よ」と読まれていたことなど、一節切についての氏の幅広い知識と経験に裏付けされた数々の貴重な話が披露された。

第二部は、講演者の相良保之氏、加藤いつみ氏、名古屋一節切尺八愛好会代表である司会の飯田勝利氏も参加する一節切の演奏会。一節切の愛好者、演奏家は全国各地に及んでおり、この日出演したのは、愛知、三重、岐阜、大阪、兵庫、大分、東京、千葉、青森からの奏者と、名古屋一節切尺八愛好会と中部大学一節切の会のメンバー、全部で26人、16組。尺八の宗家から最年少の高校一年生まで、年齢もキャリアもさまざまである。曲目もバラエティーに富み、民謡の《こきりこ》、わらべ歌の《ひらいたひらいた》、ボーカロイド曲の《千本桜》、一休作と伝えられる《紫鈴法曲》、江戸時代のはやり歌《吉野の山》、足利義満の作とされる《平調五之手》、《アメージンググレース》、本手の《切》、ジョン・ダウランドの《Flow My Tears》など16曲。独奏、合奏のほか三味線との二重奏もあった。一節切の音色を聴いたのは初めてだったが、現行の虚無僧尺八よりも柔らかく親しみやすい響きである。また、プログラムの中には聖徳太子が吹いたと言われる《蘇莫者》の雅楽尺八（レプリカ）での演奏があり、一節切と雅楽尺八の音色の違いを実感することができたのも有益だった。雅楽尺八はそれほど大きくはないが、およそ33.5センチの長さの一節切に比べるとやはり音が太くたっぷりとしているのである。

ところで、第一部の講演で加藤氏は一節切のこれからのレパートリーとして、古典の曲以外に西洋の曲や易しいわらべ歌、大人が楽しむための二重奏の曲、江戸時代のはやり歌を挙げられていた。第二部の演奏プログラムはそういった一節切の持ついろいろな可能性を実際に示す

ものとなっており、今回のこの企画がよく練られた意義深いものであったことが感じられた。講演と演奏で4時間。長丁場だったが、聴衆は熱心に聴き入り、休憩時間や終了後も互いに情報交換をしたり意見を述べあっていた。久しく顧みられることのなかった一節切の本格的な復興の動きを前進させる熱いパワーに満ちた会だった。